

木簡

木簡(もっかん)とは、、、

古代の東アジアで墨で文字を書くために使われた、短冊状の細長い木の板である。紙の普及により廃れたが、荷札には長く用いられた。

→様々な形の木簡がある。

- 板、三角錐
- 一行～三行、四行

# 木簡(もっかん)の書体、、、

- 隸書の早書き
- 篆書に近いもの・・・秦篆、楚系、齊系 等
- 楷書に近いもの

## 木簡(もっかん)の発見

ハンガリー出身のイギリス人オーレル・スタインが尼雅(ニヤ遺跡)で50枚、スウェーデンのスウェン・ヘディンが楼蘭で120枚余の晋代の木簡を発見した1901年を、遺跡からの木簡出土の嚆矢とする。

スタインは、1907年、1913年-16年の、第2次・第3次探検でも、約900枚の漢代の木簡を発見した(敦煌漢簡)。その後西北科学考察団によって、1930年にはエチナ川流域から一挙に1万点以上の大量の木簡が発見された(居延漢簡)。このときは木簡を横に並べて作った冊書が初めて見つかった。このように、20世紀前半の木簡は、ヨーロッパ人の中央アジア探検隊が西北辺境で発見したものであった。

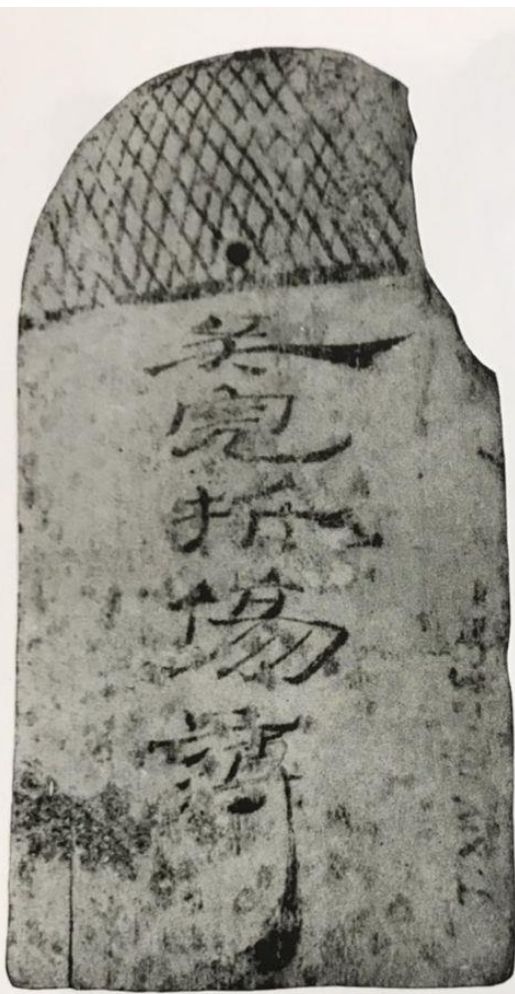
20世紀後半からは中国人が全国で多数発見するようになった。スタインらの発見は極度の乾燥状態で保存されたものだが、後半以降は地中の墓にあって水に漬かった状態や高い湿度のおかげで腐らず残ったものである。20世紀末からは古井戸からの出土も多くなり、2007年以降は骨董市場から購入する例も出てきた。発見数は100万点を超えるとも言われる。

日本と異なり、中国では竹に文字を書いた竹簡も使われた。気候の関係で竹が生育しない黄河流域以北では木の木簡も広く用いられた。紙が普及しない漢代まで、木簡・竹簡は文書の材料として広く用いられていた。中国の考古学では竹簡と木簡(木牘)を総称して簡牘という。

●縣承塞亭者謹候此  
塞障即表皆和

●縣承。塞亭各謹候。北塞障即舉表皆和。

始建國天鳳元年／玉門大煎都兵完／堅折傷簿。  
兵完折傷簿。



②4 b



②4 a





扁書亭際顯處。令盡諷誦知之。精候望卽有薰火。亭際回度舉。毋必：

高際回度舉毋必

知之精候望卽有薰火

誦知之精候望卽有

扁書高際顯處令盡諷